



「神の照明なしに人間は何かを知りうるか」( 3 )  
ガンのヘンリクス 『定期討論のスンマ』 a.1,  
q.2

著者	加藤 雅人
雑誌名	関西大学外国語学部紀要 = Journal of foreign language studies
巻	11
ページ	137-166
発行年	2014-10
その他のタイトル	utrum contingat hominem aliquid scire sine divina illustratione Henrici de Gandavo Quaestiones ordinariae (Summa), a.1, q.2: A Japanese translation with the Latin text, an introduction, and notes
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10112/9648">http://hdl.handle.net/10112/9648</a>

## 「神の照明なしに人間は何かを知りうるか」（3）

— ガンのヘンリクス 『定期討論のスンマ』 a.1, q.2 —

“*utrum contingat hominem aliquid scire sine divina illustratione*”

*Henrici de Gandavo Quaestiones ordinariae (Summa)*, a.1, q.2:

A Japanese translation with the Latin text, an introduction, and notes

加藤雅人  
Masato Kato

This is a Japanese translation with the Latin text, an introduction, and notes of Henry of Ghent's *Quaestiones ordinariae (Summa)*, a.1, q.2. Henry's Latin text used here is from *Henrici de Gandavo Quaestiones ordinariae (Summa)*, art.1 5, ed. Gordon A. Wilson (Ancient and Medieval Philosophy. De Wulf-Mansion Centre. Series II: *Henrici de Gandavo Opera Omnia*, vol.21), Leuven: Leuven University Press, 2005, pp.3-28. I have received written permission to use it from the editor Prof. Gordon A. Wilson with the following words, "The Latin text is copyrighted and is published here with the permission of the editor, and with the knowledge and consent of the De Wulf-Mansion Center and Leuven University Press." I am much obliged to Prof. Wilson and those others concerned.

Henry of Ghent (Henricus de Gandavo/ Gandavensis; d. 1293) is a thinker active and most influential at Paris University during the last quarter of the 13<sup>th</sup> century between the age of Thomas Aquinas (d. 1274) and Duns Scotus (d. 1308). The second question (q.2), *utrum contingat hominem aliquid scire sine divina illustratione*, in the first article (a.1) on the possibility of human knowledge (*de possibilitate sciendi*) in Henry's *Summa*, considers whether a human being can know something without divine illumination. While many medieval thinkers before Henry assumed that the sincere truth of knowledge requires some divine illumination, most thinkers after him, in particular Duns Scotus, denied this doctrine. So Henry was the last great thinker who defends the theory of divine illumination.

### Key words

① medieval philosophy ② Henry of Ghent ③ illumination ④ knowledge ⑤ scepticism

①中世哲学 ②ガンのヘンリクス ③照明 ④知識 ⑤懐疑主義

## はじめに

ここに翻訳するのは、13世紀の思想家ガンのヘンリクスの『定期討論のスンマ』第1項第2問である。翻訳のテキストとして、批判校訂版『ガンのヘンリクス全集』第21巻所収の *Henrici de Gandavo Quaestiones ordinariae Summa*, art.1 5, ed. Gordon A. Wilson (Ancient and Medieval Philosophy. De Wulf-Mansion Centre. Series II: *Henrici de Gandavo Opera Omnia*, vol.21), Leuven: Leuven University Press, 2005, pp.29-69 を用いる<sup>1)</sup>。

## 第2問「神の照明なしに人間は何かを知りうるか」の議論の構造—異論と異論解答

第2問の異論と異論解答の議論の構造をまとめると、以下のようになる。

〈異論〉「神の特別な照明なしに人間は何かを知ることはできない」

- 【1】パウロが「われわれの十分な力は神から来る」と言うように、我々が真理を認識するための十分な力は神から、すなわち神の特別な照明によって与えられる。
- 【2】パウロが「人は誰も聖霊においてしか『主イエス』とは言えない」と言い、アンブロシウスが「真は聖霊からしか生じない」と言うように、真は、心の言葉（聖霊）すなわち特別な照明によってしか認識されない。
- 【3】アウグスティヌスが「諸学問の対象も、それがきわめて真なることを誰もが疑いなく認めるとしても、太陽のような他者によって照らされるのでなければ、それは理解されえない」と言うが、その「太陽のような他者」とは神の光に他ならない。太陽に「あること、輝くこと、照らすこと」があるように、神には「あること、知解すること、他の事物を知解されるようにすること」がある。
- 【4】また、アウグスティヌスが「あらゆる理性的魂が思考し推論するとき、何であれその推論における真は、その魂ではなく、どんなに微かにでもその魂に触れる真理の光に帰属する」と言う。
- 【5】また、アウグスティヌスは「我々両者が[真を認めるとき]、我々の心を越えた不変の真理そのものにおいて見る」と言うように、その真理は我々の自然本性を超越しているため、神の特別な照明によってしか見えない。

〈反対異論〉「神の特別な照明なしに人間は何かを知ることができる」

- 【1】アウグスティヌスは「真理へと到る道は、熱心な真理の探究以上にはない」と言う。もし、人間が特別な神の照明なしにその探究によって真理に到達できないなら、その探究は虚しいものになる。

「神の照明なしに人間は何かを知りうるか」(3) —ガンのヘンリクス『定期討論のスンマ』a.1, q.2— (加藤)

【2】アリストテレスは「すべての人間は自然本性において知ることを欲する」と言う。人間が自然本性において欲するのは、自然本性によって知ることができるものだけである。

〈解答(主文)〉「神の特別な照明なしに人間は何らかの真理を知ることができる。しかし、純正真理の認識にはそれが必要である」<sup>2)</sup>

〈異論解答〉「神の特別な照明なしに人間は何かを知ることができる」

【1】パウロの言葉が当てはまるのは、信仰の起源としての神の場合、および純正真理の認識における特別な照明者としての神の場合である。自然的活動の第一の普遍的動者としての神の場合、特別な照明は問題となっていない。

【2】パウロやアンブロシウスの引用が当てはまるのは、意志の同意が必要とされる完全な言葉に関してのみである。純正な信仰に属する事柄に関する完全な言葉は、信仰に基づいて聖霊の特別な照明なしには語るができない。しかし、だからといって、純正でない真理の単純な言葉も、特別な照明なしに語れないというわけではない。

【3】アウグスティヌスの引用が当てはまるのは、純正真理と絶対不可謬な知の場合である。しかし、諸学問の可視的对象は、自然的光の照明の中で別の仕方では知解される。

【4】アウグスティヌスの言葉が当てはまるのは、明晰な真理を認識することによって思考し推論する事柄に関してである。

【5】同上。また、第一真理において真を見ろということは、第一真理を認識対象として見る場合(B2-1)と、認識観点として見る場合(B2-2)とがある。前者の場合、すべての真理が見られるが、後者の場合は、純正真理のみが見られる。アウグスティヌスが善・美・真の認識について語る時、彼はつねにこれら二つの仕方のどちらかに則して語っている。

〈反対異論解答〉「神の特別な照明なしに人間は何らかの真理のみ認識できる」

【1】アウグスティヌスの言葉は、純正真理についてではなく、何らかの真理が神の特別な照明なしに人間によって認識されるということを示している。

【2】アリストテレスの言葉は、自然本性的に知ることができる限りの真理には当てはまる。しかし、人間は超自然的に知られるべき事柄さえも、自然本性的欲求によって知りたいと欲するが、このような事柄には神の特別な照明が必要である。

#### 注

1) 著作権使用について快く承諾して頂いた編者 Gordon Wilson 教授、De Wulf Mansion センター、および Leuven 大学出版局に対して感謝する。翻訳にあたって、以下の英訳を参照した。*Henry of Ghent's*

Summa of Ordinary Questions *Article One: On the Possibility of Knowing*, tr. by Roland J. Teske, S.J., St. Augustine's Press: South Bend, Indiana, 2008; "Henry of Ghent Can a Human Being Know Anything without Divine Illumination?", tr. by R. Pasnau, in *Cambridge Translations of Medieval Philosophical Texts. Volume III: Mind and Knowledge*, Cambridge U.P., 2002, pp.109-135.

- 2) 加藤雅人訳「神の照明なしに人間は何かを知りうるか」(2) —ガンのヘンリクス『定期討論のシンマ』a.1, q.2—、『外国語学部紀要』第10号、関西大学外国語学部、2014年3月、pp.107-139、「解説」(pp.108-113)参照。

## Henricus de Gandavo, *Quaestiones ordinariae (Summa)*, a.1, q.2

(the last part of three parts series)

Responsio autem huius ad praesens, quae magis ibi declarabitur, est quia, ad hoc quod aliqua conceptio in nobis de veritate rei extra vera sit sincera veritate, oportet quod anima, in quantum per eam est informata, sit similis veritati rei extra, cum «*veritas sit quaedam adaequatio rei et intellectus*». Quare cum, ut dicit AUGUSTINUS II<sup>o</sup> De libero arbitrio, «*anima de se sit mutabilis a veritate in falsitatem, et ita quantum est de se non sit veritate cuiusquam rei informata, sed informabilis, nulla autem res se ipsam formare potest, quia nulla res potest dare quod non habet*», oportet ergo quod aliquo alio, sincera veritate, de re informetur. Hoc autem non potest fieri per exemplar aliquod acceptum a re ipsa, ut prius ostensum est. Necesse est ergo quod ab exemplari incommutabilis veritatis formetur, ut vult AUGUSTINUS ibidem. Et ideo dicit libro De vera religione: «*Sicut eius veritate vera sunt quaecumque vera sunt, ita et eius similitudine similia sunt*». Necesse est ergo quod illa veritas increata in conceptu nostro se imprimat, et ad characterem suum conceptum nostrum transformet, et sic mentem nostram expressa veritate de re informet similitudine illa quam res ipsa habet apud primam veritatem, secundum quod dicit XI<sup>o</sup> De Trinitate: «*Ea quippe de illa prorsus exprimitur, inter quam et ipsam nulla natura interiecta est*»

Et quomodo sit ista expressio, declarat per simile, cum dicit XIV<sup>o</sup> De Trinitate: «*Ubi sunt illae regulae scriptae quibus quid sit iustum, quid iniustum agnoscitur; nisi in libro lucis illius quae veritas dicitur; unde lex omnis iusta describitur et in cor hominis non migrando, sed tamquam imprimendo transfertur; sicut imago ex anulo et in ceram transit et anulum non relinquit?*» Et haec est lucis illius informatio qua, in quantum lucet, homo verax fit in intellectu; in quantum vero contingit, iustus fit in affectu. Secundum quod de primo dicit AUGUSTINUS Super Ioannem, sermone 39<sup>o</sup>: «*Factus est oculus tuus particeps huius lucis. Clausus est? Hanc lucem non minuisti. Apertus est? Hanc lucem non auxisti, sed est verax anima, est veritas apud Deum, cuius est particeps anima. Cuius particeps si non fuerit anima, omnis homo mendax est*». De secundo vero dicit in Sermone quodam

## ガンのヘンリクス『定期討論のスンマ』 a.1, q.2<sup>1)</sup>

(承前)

しかし、このこと [B2 2: 神の範型を認識観点として参照することによって純正真理が知られるのは、どのようにしてか] への解答は、次問 [第3問: 人間は他のものを認識するための神の光を認識するのか] でもっと詳しく解明される<sup>67)</sup>が、目下のところ、次の如くである。我々の中にある外的事物の真理についての何らかの概念が、純正真理によって真となるためには、魂は、それ [純正真理] によって形成される限りにおいて、外的事物の真理と類似していなければならない<sup>68)</sup>。なぜなら、《真理は》ある種の《ものと知性の対等<sup>69)</sup>》だからである。したがって、アウグスティヌスが『自由意志論』第2巻において言うように、魂それ自体は真理から虚偽へと《可変的》であるから、それ自身に関する限り、いかなる事物の真理によっても形成されておらず、《形成可能であり、また、いかなるものも自身が持っていないものを与えることはできないので、いかなるものもそれ自身を形成することはできない<sup>70)</sup>》。したがって、[魂は] 他の何らかのもの、すなわち事物についての純正真理によって、形成されなければならない。しかし、上述のように<sup>71)</sup>、このことは、事物それ自体から受け取られた何らかの範型によっては生じない。したがって、アウグスティヌスが同所<sup>72)</sup>で言おうとしたように、[魂は] 不変的真理の範型によって形成される必要がある。それゆえ、アウグスティヌスは『真の宗教』で言う。《何であれ真なるものは真理によって真であるように、似ているものは類似 [性] によって似ている<sup>73)</sup>》。それゆえ、創造されない [永遠の] 真理が我々の概念に自らを刻印し、自らの印章に則して我々の概念を変容し、こうして、事物そのものが第一真理のもとで持っている類似によって表出された、事物についての真理によって、我々の心を形成しなければならない。アウグスティヌスは『三位一体論』第XI巻で言う。《じっさい、それ [第一真理] を十分に表出しているのは、自己とそれ [第一真理] の間にいかなる本性も置かれていない類似だけである<sup>74)</sup>》。

そして、この表出はどのようにして [起こる] かについて、[アウグスティヌスは] 『三位一体論』第14巻で比喩的に説明して言う。《正義とは何であり、不正義とは何であるかが理解されるための規則は、真理と呼ばれる光の書物の中以外、どこに書かれているのか? ここ [真理の光] から、すべての正しい法は書き写され、人間の心へと、移動するのではなくいわば刻印することによって、移される。ちょうど、像が指輪から蠟へと移り、しかも指輪を離れないように<sup>75)</sup>》。これが、光による形成であり、[この光が] 輝く限りにおいて、人間はこの光によって知性において真となる。他方、[この光が] 触れる限りにおいて、[人間はこの光によって] 情態において正しくなる。第一の点について、アウグスティヌスは『ヨハネ福音書注解』で言う。《貴方の目はこの光の分有者となされた。目は閉じていたのか? そうなら、貴方はこの光を弱めなかった。目は開かれていたのか? そうなら、貴方はこの光を強めなかった。しかし、魂が真であるなら、その魂が分有する真理は神の中にある。そして、その魂がその真理を分有しないなら、すべての人間は嘘つきになる<sup>76)</sup>》。

de expositione Sacrae Scripturae: «*In Deo*», inquit, «*omne quod dicitur id ipsum est; neque enim in Deo aliud est potestas, aliud prudentia, aliud fortitudo, aliud iustitia, aliud castitas, quia haec animarum sunt, quas illa lux perfundit quodammodo et suis qualitatibus afficit, quomodo cum oritur ista lux visibilis, si auferatur, unus est corporibus omnibus color, qui potius dicendus est nullus color; cum autem illata illustraverit corpora, quamvis ipsa unius modi sit, pro diversis tamen corporum qualitatibus diverso ea nitore aspergit; ergo animarum sunt illae affectiones quae bene sunt affectae ab illa luce quae non afficitur et formatae ab illa quae non formatur*». Perfecta igitur, ut dictum est, informatio veritatis non habetur nisi ex similitudine veritatis menti impressae de re cognoscibili ab ipsa prima et exemplari veritate. Omnis enim alia impressa, a quocumque exemplari abstracto a re ipsa, imperfecta obscura et nebulosa est, ut per ipsam certum iudicium de veritate rei haberi non possit. Propter quod AUGUSTINUS comparat primam et iudicium per eam sereno aeri super nubem, secundam vero et iudicium per eam aeri nebuloso vel obscuro sub nube, cum dicit IX<sup>o</sup> De Trinitate cap.<sup>o</sup> 6<sup>o</sup>: «*Claret desuper iudicium veritatis ac sui iuris incorruptissimis regulis firmum est, etsi corporalium imaginum quasi quodam nubilo subtexitur. Sed interest utrum ego sub illa vel in illa caligine tamquam a caelo perspicuo secludar an sicut in altissimis montium accidere solet, et inter utrumque aere libero fruens et serenissimam lucem supra et densissimas nebulas subtus aspiciam*».

*Et est sciendum quod dictus modus cognoscendi veritatem communis est et ad notitiam principiorum, ut supra in argumento tertio huius quaestionis, et ad notitiam conclusionum, ut patet in omnibus iam inductis. Et ita per hunc modum acquirendi notitiam veritatis verarum artium habitus in nobis generantur, qui in memoria reconduntur, ut ex eis iterato conceptus similes formemus, et quoad habitus, tam principiorum quam conclusionum, ut secundum hoc intelligamus illud AUGUSTINI IX<sup>o</sup> De Trinitate : «*In illa aeterna veritate visa mentis conspiciamus, atque inde conceptam veracem notitiam rerum tamquam verbum apud nos habemus*», quod in habitu memoriae concipitur, ut ad illam intelligentia revertens iterato verbum formet, et hoc per certam scientiam habeat etiam de rebus transmutabilibus, secundum quod dicit AUGUSTINUS XII<sup>o</sup> De Trinitate cap.<sup>o</sup> 14<sup>o</sup>: «*Non solum rerum sensibilem in loco positaram*», et cetera, ut supra in quaestione praecedenti in solutione quarti argumenti, ubi de hoc.*

Iste ergo est verior modus acquirendi scientiam et notitiam veritatis quam ille quem ponit ARISTOTELES ex sola sensuum experientia, si tamen sic intellexit ARISTOTELES et in idem cum PLATONE non consensit. Immo, quod verius creditur, etsi PLATONI in modo dicendi obviavit, occultando divinam doctrinam magistri sui, sicut et alii priores ACADEMICI, eandem tamen cum PLATONE de notitia veritatis habuit sententiam, secundum quod hoc videtur insin-



他方、第二の点について、アウグスティヌスは聖書講解のある説教の中で言う。《語られるすべてのことは、神においては、同一である。じっさい、神においては、力、賢慮、強さ、正義、純潔などは別ではない。なぜなら、これら〔の多様性〕は、ちょうど可視的な光〔太陽〕が上るときのように、その〔神の〕光が何らかの仕方で溢れその光の質によって変容されている魂に属するからである。その光が除かれたら、すべての物体には一つの色しかなくなり、むしろ無色と言われるべき状態になるだろう。しかし、光があつて物体を照明するとき、その光そのものは一つの仕方でしかなくても、物体に対してはその質に応じてさまざまな輝きを振りかける。したがって、魂にはそのような〔多様な〕状態があり、それらの状態は、それ自体は多様化されない光によって多様化され、それ自体は形成されない光によって形成される<sup>77)</sup>》。したがって、上述のように、真理による完全な形成は、認識対象について、第一の典型的真理によって心に刻印された真理の類似からしか得られない。じっさい、何であれもの自体から抽象された範型によって刻印された他のすべて〔の類似〕は、不完全で薄暗く雲がかかっている。その結果、それ〔不完全な類似〕によってももの真理についての確実な判断は得られない。このゆえに、アウグスティヌスは、第一〔の類似〕とそれによる判断を、雲の上の澄みきった空気に、第二〔の類似〕とそれによる判断を、雲の下の雲がかかった薄暗い空気にたとえて、『三位一体論』で言う。《真理の判断は、物的像によっていわば雲に覆われているとはいえ、その上から輝き、その法の判断は不朽の規則によって堅固である。しかし、私が明るい天空から閉め出されて、あの霧の下かその中にいるのと、高い山で起こるように、天空と雲との間の自由な空気を享受しつつ、上に澄んだ光を見て下に濃い雲を見るのとは、異なるのである<sup>78)</sup>》。

また、真理のこの認識様態は、本問の第3異論にあるように、原理の知にも結論の知にも共通であるということを知らねばならない。こうして、真理の知を獲得するこの様態によって、真なる技術知の所有態が我々の中に生じ、それ〔所有態〕が記憶の中に蓄えられ、そこから再び我々は、原理のであれ結論のであれ、所有態において、類似した概念を形成する。《かの永遠の真理において、我々は心で見たものを見る。そしてそこから言葉として懐念された真なる知を、我々是我々の内に持っている<sup>79)</sup>》。それは記憶という所有態で懐念され、知解がそこに戻ってきたとき再び言葉を形成し、またこのことを確実な知識を通じて可変的事物についても行う。だから、アウグスティヌスは『三位一体論』で《場所に置かれた可感的事物についても<sup>80)</sup>》等々と言う。これは、前問第4異論への解答<sup>81)</sup>において扱われたとおりである。

それゆえ、それ〔真理のこの認識様態〕は、アリストテレスが指定した感覚の経験のみによる様態よりも、知識と真理の知を獲得するより真なる方法である。ただし、アリストテレスがそのように理解し、その点でプラトンに同意しなかったならば、である。ところが実は、たとえ彼〔アリストテレス〕が、アカデメイア派の他の先人たちと同様に、自らの師〔プラトン〕の神的な教えを隠すという仕方で、語り方の面でプラトンから逸れたとしても、真理の知については、プラトンと同じ考えをもっていた。『形而上学』第2巻で〔アリストテレスが〕真理の認識について語り、《最高

uasse cum loquens de veritatis cognitione dicit in II<sup>o</sup> Metaphysicae quod *«illud quod est maxime verum sit causa veritatis eorum quae sunt post, et quod ideo dispositio cuiuslibet rei in esse sit sua dispositio in veritate»*. Propter quod dicit AUGUSTINUS in fine De Academicis : *«Quod autem ad eruditionem doctrinamque attinet et mores quibus consulitur animae, non defuerunt acutissimi ac solertissimi viri qui docerent disputationibus suis Aristotelem et Platonem ita sibi concinere ut imperitis minusque attentis dissentire videantur multis contentionebus. Sed tamen eliquata est, ut opinor, vera verisimae philosophiae disciplina. Non enim est ista huius mundi philosophia quam sacra detestantur, sed alterius intelligibilis, cui animas multiformis erroris tenebris caecatas numquam ista ratio subtilissima revocaret, nisi summus Deus populari quadam clementia divini intellectus auctorem usque ad ipsum corpus humanum declinaret, cuius non solum praeceptis, sed etiam factis excaecatae animae redire in semet ipsas etiam sine disputationum concertatione potuissent»*, *«cum iam»*, ut dicit in Epistola ad Dioscorum , *«Christianae aetatis exordio rerum invisibilium atque aeternarum fides per visibilia miracula salubriter praedicaretur hominibus qui nec videre nec cogitare aliquid praeter corpora poterant»*.

Hoc ergo modo, qui mente excedente aliquid veritatis sincerae intelligit, in rationibus primae veritatis intelligit. *«Sed»*, ut dicit AUGUSTINUS De videndo Deum , *«forte hoc difficile est. Irruit enim de consuetudine carnalis vitae in interiores oculos nostros turba phantasmatum»*. *«Quae»*, ut dicit III<sup>o</sup> De Academicis cap.<sup>o</sup> 9<sup>o</sup>, *«consuetudine rerum corporalium nos etiam cum veritas tenetur et quasi in manibus habetur, decipere atque illudere moliantur»*. Igitur, ut dicit De videndo Deum , *«qui hoc non potest oret et agat ut posse mereatur, nec ad hominem disputatorem pulset ut quod non legit legat, sed ad Deum Salvatorem ut quod non valet valeat»*.

Ex puris igitur naturalibus exclusa omni divina illustratione nullo modo contingit hominem scire liquidam veritatem. Sed tamen adhuc restat quaestio utrum ex puris naturalibus possit scire eam. Si enim homo ex puris naturalibus potest attingere ad illam lucis divinae illustrationem et per illam scire sinceram veritatem ex puris naturalibus, debet dici posse scire sinceram veritatem, licet sine illa illustratione eam scire non possit, sicut si ex puris naturalibus potest attingere ad prima principia disciplinarum et per illa scire alia ex puris naturalibus, dicitur scire illa, licet ea non possit scire sine primis principiis. Quod si ex puris naturalibus non possit attingere ad illam illustrationem, nec per illam ex puris naturalibus dicendus est scire

度に真なるものが、後に続くものの真理の原因であり》それゆえ《何であれもののエッセにおける状態がそのものの真理における状態である<sup>82)</sup>》と言う時、彼はこのこと〔プラトンへの同意〕を示唆しているように思われる。それゆえ、アウグスティヌスは『アカデメイア派駁論』で言う。《しかし、魂をよく導く学識と教説と道徳に関しては、非常に鋭敏で才気ある人々がおり、彼らは、アリストテレスとプラトンは互いに一致しているが、未熟で注意力の劣る人々には多くの論争点において一致していないように見えるのだと、討論において教えた。しかし、私が思うに、最高に真なる哲学の真なる教えは濾過純化されている。というのも、それは、聖なる教えが嫌っているこの世界の哲学ではなく、別の英知界の哲学だからである。この英知界の哲学へと、多種多様な誤謬の闇によって盲目となっている魂を呼び戻すことは、至高の神が人々への憐れみによって神の知性の権威を人間の身体にまで屈曲させなければ、どんなに精緻な推論でも不可能であろう。この神の知性の指令だけでなく神の活動によっても喚起されて、魂は、議論の衝突なしに自己自身へと立ち還ることができるだろう<sup>83)</sup>》。というのも、アウグスティヌスが『ディオスコルスへの手紙』で言うように、《キリストの時代の最初から、目に見えない永遠の实在への信仰は、物体以外の何も見たり考えたりできない人間に対しては、目に見える奇跡によって公然と明示されていたからである<sup>84)</sup>》。

こういうわけで、心が超越して純正真理についてある程度知解する者は、第一真理のラチオにおいてそれを知解する。アウグスティヌスは『神を見ることについて』で言う。《しかし、このことは困難であろう。というのも、物的な生活への慣れによって、我々の心の中の目には雑多な表象像が浮かんでくるからである<sup>85)</sup>》。アウグスティヌス『アカデメイア派駁論』によれば、《これら〔表象像〕は、真理が所有されいわば我々の手の中に保持されているときでも、物的な事物への慣れによって我々を欺き惑わそうとする<sup>86)</sup>》。したがって、アウグスティヌスは『神を見ることについて』で言う。《このことができない者には折らせ、できるに値するように振る舞わせよう。そして、読んだことのないものを読むために人間の教師の戸を叩くのではなく、できないことをできるようにするために救世主である神の戸を叩かせよう<sup>87)</sup>》。

したがって、神の照明をいっさい排除して、純粋に自然本性的に、人間が(B2)明晰な真理を認識することは、けっしてできない。しかし、[そもそも]純粋に自然本性的に、人間はそれ[明晰な真理=純正真理]を知りうるのかという問題が依然として残っている。というのも、もし人間が純粋に自然本性的に神の光の照明を獲得に到達することができ、その照明を通じて純粋に自然本性的に純正真理を知ることができるなら、神の照明なしには純正真理を知ることができないとはいえ、純粋に自然本性的に人間は純正真理を知ることができると言われるべきだからである。それはちょうど、もし人間が純粋に自然本性的に諸学問の第一諸原理に到達することができ、その原理を通じて純粋に自然本性的にその他のものを知ることができるなら、第一諸原理なしにその他のものを知ることができないとはいえ、人間は純粋に自然本性的にその他のものを知ることができると言われるのと同じである。しかし、もし人間が純粋に自然本性的に神の照明に到達することができないなら、本問解答の初めに言われたように<sup>88)</sup>、人間はその照明を通じて純粋に自然本性的に明晰な

liquidam veritatem, ut dictum est in principio solutionis huius.

Nunc autem ita est quod homo ex puris naturalibus attingere non potest ad regulas lucis aeternae, ut in eis videat rerum sinceram veritatem. Licet enim pura naturalia attingunt ad illas, quod bene verum est — sic enim anima rationalis creata est, ut immediate a prima veritate informetur, ut iam prius dictum est —, non tamen ipsa naturalia ex se agere possunt ut attingant illas, sed illas offert Deus quibus vult et quibus vult subtrahit. Non enim quadam necessitate naturali se offerunt, ut in illis homo veritatem videat, sicut lux corporalis, ut in ea videat colores, sicut nec ipsa nuda divina essentia. Secundum enim quod determinat AUGUSTINUS De videndo Deum, «*si vult, videtur; si non vult, non videtur*». Unde et regulas aeternas Deus aliquando offert malis, ut in eis videant multas veritates quas boni videre non possunt, quia praescientia regularum aeternarum non offertur eis, secundum quod dicit AUGUSTINUS IV<sup>o</sup> De Trinitate cap.<sup>o</sup> 16<sup>o</sup>: «*Sunt nonnulli qui potuerunt aciem mentis ultra omnem creaturam transmittere et lucem incommutabilis veritatis quantulumcumque parte contingere, quod Christianos ex fide sola viventes nondum potuisse derident*». Eisdem etiam regulas aliquando eis subtrahit et eos in errorem cadere permittit, secundum quod super illud I o b XXXVIII<sup>o</sup>, «*Immanibus abscondit lucem*», dicit GREGORIUS XXVII<sup>o</sup> M o r a l i u m : «*Immanes sunt qui se elatis cogitationibus extollunt. Sed his lux absconditur, quia nimis in cogitationibus suis superbientibus cognitio veritatis denegatur*». Aliis autem omnibus «*pro sua sanitate*» aspiciendum conceditur, ut dicit AUGUSTINUS I<sup>o</sup> Soliloquiorum .

Absolute ergo dicendum quod homo sinceram veritatem de nulla re habere potest ex puris naturalibus eius notitiam acquirendo, sed solum illustratione luminis divini, ita quod licet in puris naturalibus constitutus illud attingat, tamen ex puris naturalibus naturaliter attingere illud non potest, sed libera voluntate quibus vult se ipsum offert.

< AD ARGUMENTA >

Ad singula argumenta aliquid respondendum est.

Quod ergo arguitur quod «sufficiencia nostra in cognoscendo ex Deo est», dicendum quod verum est tamquam specialiter illustrante in cognitione sincerae veritatis; in omni autem alia cognitione cogitationis non nisi sicut ex universali movente, ut dictum est iam. Et hoc sufficit ARTICULUS I ad intentionem APOSTOLI contra illos qui dicebant quod initium fidei esset ex

真理を知るとは言われるべきではない。

しかし、じっさい、人間は、純粹に自然本性的に、永遠の光の規則に到達し、その規則においてももの純正真理を観ることはできない。というのも、たしかに純粹に自然本性的なものがそれ〔永遠の規則〕に到達する—じっさい、既に述べられたように<sup>89)</sup>、理性的魂は、第一真理によって直接的に形成されるように創造されている—けれども、自然本性的なものはそれ〔永遠の規則〕に到達するように自力で活動することはできず、それ〔永遠の規則〕を、神は神が望む人に与え、神が望む人から取り去るからである。というのも、物的な光において人間が色を見るのとはちがって、〔永遠の規則は〕神の赤裸々な本質と同様、何らかの自然的必然性によって与えられそれ〔永遠の規則〕において人間は真理を観る、というわけではないからである。じっさい、アウグスティヌスは『神を見ることについて』で《神が望むなら神は見られ、神が望まないなら神は見られない<sup>90)</sup>》と言う。こうして、神は時々悪い人々にも永遠の規則を与え、それ〔永遠の規則〕において多くの真理を彼ら〔悪い人々〕に見させることがあるが、それらの真理を良い人々は、永遠の規則の前知が与えられていないがゆえに、見ることはできないのである。アウグスティヌスは『三位一体論』で言う。《ある人々は、心の眼差しを被造物全体にまで送り、たとえわずかでも不変的真理の光に触れることができた。このことは信仰のみによって生きるキリスト者たちにはまだなしえていないと彼らは嘲る<sup>91)</sup>》。また、〔神は〕時には同じ〔永遠の〕規則を彼ら〔悪い人々〕から取り去り、彼らが誤りに陥るのを許すこともある。『ヨブ記』(36:32)の言葉《彼の手の中で光を隠す》に従って、グレゴリウスは『道徳論』で言う。《自分の傲慢な考えを絶賛する人々は奇怪である。しかし、光は彼らには隠されている。なぜなら、真理の認識は、思考において傲慢すぎる人々には与えられないからである》。しかし、アウグスティヌスが『ソリロクシア』で言うように、それ〔光〕を見ることは、その他のあらゆる人々に《自らの健全さに応じて<sup>92)</sup>》、認められている。

それゆえ、端的に以下のように言わなければならない。人間は、何であれものについての純正真理を、純粹に自然本性的にその知を獲得するという仕方ではなく、ただ神の光の照明によってしか、持つことができない。したがって、純粹に自然本性的なものにおいて構成された〔人間〕がそれに到達するとはいえ、純粹に自然本性的に自然〔必然〕的にそれに到達することができるわけではなく、自由意志によって〔神が〕望む人にそれは与えられるのである。

### <異論解答>

個々の異論に対して、以下のことを答えなければならない。

〔第1異論解答〕それゆえ、《認識することにおける我々の十分な力は神から来る<sup>93)</sup>》という第1異論に対して、次のように言わなければならない。このことは、すでに述べられたように<sup>94)</sup>、純正真理の認識における特別な照明者としては当てはまるが、その他すべての思考の認識においては、普遍的動者としてのみ当てはまる。そして、信仰の開始は我々に由来すると言った人々に対して、使徒〔パウロ〕がそこで反論しようとした意図としては、これで十分である。というのも、もし認

nobis, contra quos ibi arguit. Si enim initium cognitionis non est ex nobis, sed ex Deo, ut ex primo motore in omni actione, et naturali et cognitiva, multo fortius nec initium fidei. Nec est intentio APOSTOLI contra hoc quin initium cognitionis magis sit ex nobis quam initium fidei, quia fidei initium requirit specialem illustrationem, non sic autem initium cognitionis, nisi sit de veritate sincera, ut dictum est.

Ad secundum, quod «nemo potest dicere ‘Dominus Iesus’», etc., dicendum quod verum est verbo perfecto, ad quod requiritur consensus voluntatis. Perfectum enim verbum tunc est cum in eo quod mens novit voluntas delectata conquiescit. Unde dicit AUGUSTINUS IX<sup>o</sup> De Trinitate quod «*verbum perfectum est cum amore notitia*». Unde sicut voluntas ex propria facultate naturali non potest assurgere in bonum sine specialis gratiae adiutorio, sic nec addicere tale verbum. Nec tamen sequitur quin simplex verbum veritatis non sinceræ poterit dicere sine omni speciali illustratione Spiritus Sancti. Unde dicit Glossa quod APOSTOLUS «*proprie*» posuit ibi hoc verbum ‘dicere’, significans «*voluntatem et intellectum dicentis*», et tale dicere circa ea quæ sunt fidei puræ non potest aliquis nisi ex fide. Unde de alio simplici dicere dicitur Matthæi VI<sup>o</sup>: «*Non omnis qui dicit ‘Domine, Domine’* », etc.

Ad tertium, quod «scientiarum spectamina non possunt intelligi nisi alio quodam quasi suo sole illustrentur», dicendum quod verum est sincera veritate et omnino infallibili notitia. Alio tamen modo possunt intelligi in lumine lucis naturalis, ut dictum est supra. Propter quod dicit AUGUSTINUS XII<sup>o</sup> De Trinitate : «*Credendum est mentis intelligibilis ita conditam esse naturam ut rebus intelligibilibus naturali ordine disponente conditore subiecta sic videat ista in quadam luce sui generis incorporea, quemadmodum oculus carnis videt quæ in hac luce corporea circumiacent, cuius lucis capax eique congruus est creatus*».

Ad quartum, quod «quidquid anima cogitat aut ratiocinatur ei luci tribuendum est a qua tangitur», dicendum quod verum est de eis quæ cogitat aut ratiocinatur cognoscendo liquidam veritatem. Alias autem non oportet, ut dictum est.

Eodem modo dicendum est ad quintum. Vel dicendum quod videre verum in prima veritate potest esse aut sicut in eo quod est obiectum primo visum aut sicut in eo quod est ratio videndi tantum, ut in sequenti quaestione declarabitur. Primo modo omnis veritas videtur in prima veritate, sicut omne bonum in primo bono, quia quicumque videt verum hoc aut verum illud videt



「神の照明なしに人間は何かを知りうるか」(3) —ガンのヘンリクス『定期討論のスンマ』a.1, q.2— (加藤)

認識の開始が我々に由来するのではなく、あらゆる自然的かつ認識的活動における第一動者としての神に由来するなら、ましてや信仰の開始は我々に由来するのではないからである。また、使徒〔パウロ〕の意図は、認識の開始のほうが信仰の開始よりも多く我々に由来するということと対立しない。なぜなら、すでに述べられたように<sup>95)</sup>、信仰の開始には特別な照明が必要であるが、認識の開始には、純正真理に関してしか、そう〔特別な照明が必要〕ではないからである。

〔第2異論解答〕《誰も「主イエス」とは語れない<sup>96)</sup>》等々という第2異論に対して、次のように言わなければならない。このことが当てはまるのは、意志の同意が必要とされる完全な言葉についてである。じっさい、完全な言葉が生じるのは、心が知っていることに意志が喜んで憩うときである。ここからアウグスティヌスは『三位一体論』で言う。完全な《言葉は愛をともなう知である<sup>97)</sup>》。したがって、意志は、特別な恩寵の助けなしには、固有の自然本性的能力によって善へと到達できないように、そのような言葉にも到達できない。しかし、だからといって、純正でない真理の単純な言葉も、聖霊の特別な照明なしには語るができない、というわけではない。こうして、『注解』によれば、使徒〔パウロ〕は、「語る」という言葉をここでは《本来の意味で、語る者の意志と知性を意味表示して<sup>98)</sup>》用いた。そして、純正な信仰に属する事柄に関してそのような言葉を語ることは、人は信仰に基づかなければできない。こうして、『マタイによる福音書』において、他の単純なものについて語ることは、《「主よ、主よ」と語る者だけがというわけではない<sup>99)</sup>》等々と言われている。

〔第3異論解答〕《諸学問の可視的对象は、いわば太陽のような他者によって照らされるのでなければ知解されえない<sup>100)</sup>》という第3異論に対して、それが当てはまるのは、純正真理と絶対不可謬な知の場合であると言わなければならない。しかし、すでに述べられたように、それら〔可視的对象〕は自然的光の照明の中で別の仕方では知解される。それゆえ、アウグスティヌスは『三位一体論』で言う。《次のように信じなければならない。可知的な心の本性は、創造者の配剤によって本性の秩序において可知的な事物の下に置かれ、それらの事物をある独自の非物体的な光の中で見るように造られている。ちょうど、この物体的な光を受け容れ適合するように造られている肉体の眼が、この物体的な光の中で周囲の事物を見るように<sup>101)</sup>》。

〔第4異論解答〕《何であれ魂が思考し推論することは、その魂にではなく、その魂に触れる真理の光に帰属する<sup>102)</sup>》という第4異論に対して、次のように言わなければならない。このことが当てはまるのは、明晰な真理を認識することによって思考し推論する事柄についてである。そうでないなら、その光は必要ないだろうことは、上述のとおりである。

〔第5異論解答〕第5異論に対しても、上と同じように言わなければならない。あるいは、次のように言わなければならない。第一真理において真を見ることは、次問(q.3)において明らかにされるだろうように、第一に見られる対象としてのそれ〔第一真理〕において見る場合と、見る観点としてのみのそれ〔第一真理〕において見る場合がある。(B2 1) 第一の仕方では、第一善においてすべての善が見られるように、第一真理においてすべての真理が見られる。なぜなら、あれこ

verum simpliciter in universali, quod Deus est, sicut qui videt bonum hoc vel bonum illud videt in universali bonum simpliciter, quod Deus est, ut dicit AUGUSTINUS VIII<sup>o</sup> De Trinitate et inferius determinabitur; secundo autem modo non nisi veritas sincere visa, ut dictum est. Et sunt isti duo modi cognoscendi verum, pulchrum, bonum, etc., quae nobilitatis sunt in Deo et conveniunt creaturis, notandi, quia de eis loquitur AUGUSTINUS in diversis locis, quandoque secundum unum modum dicens non cognosci bonum, pulchrum, verum, et huiusmodi in creaturis nisi per verum, pulchrum, bonum in creatore, quandoque vero loquitur secundum alium; sed omnis sua determinatio circa hanc materiam vergit in unum illorum modorum.

Argumenta duo in oppositum bene probant quod veritas aliqua sine speciali illustratione divina ab homine possit sciri et cognosci, non tamen probant quod sincera.

Vel si velimus, possumus dicere, et forte melius, quod homo ex puris naturalibus suis sine omni supernaturali illustratione divini exemplaris assistentis potest per intellectum solum cognoscere id quod verum est de re sequendo sensum, ut dictum est supra, clarius tamen cernendo quod verum est quam sensus cernat, quia «intellectus *subtilius apprehendit* et plus *infunditur in substantiam receptibilis* quam sensus, qui solum percipit *exteriora* secundum superficiem», ut dicit AVICENNA in IX<sup>o</sup> Metaphysicae suae; quodque veritatem ipsam rei nequaquam, sive in modico sive in multo, sine illustratione divini exemplaris possit percipere; et quod exemplar abstractum a re ad hoc non sufficiat per se, sed oportet conceptum de re ad exemplar acceptum a re determinari per divinum exemplar, ut si in illo conceptu debeat videre veritatem sinceram et liquidam, clarius illustretur intellectus exemplari divino, et si aliquo modo, quantumcumque tenui, etiam tenuiter ipso illustretur, et si nullo modo eo illustretur, nullo modo videat ipsam veritatem, ut dicamus quod huius exemplaris praesentatio secundum communem cursum vitae huius, quamquam gratuito concedatur nec naturalia animae sic sunt ordinata ut sua naturali operatione ad ipsum possint attingere, omnibus tamen quantum est ex parte Dei aequaliter praesentatur, ut unusquisque secundum dispositionem et capacitatem suam eo illustretur, nisi exigente eminente malitia aliquis mereatur ut ei omnino subtrahatur, ne ullam veri-



れ〔個別〕の善を見る人は誰であれ端的な普遍的善すなわち神を見るように、あれこれ〔個別〕の真を見る人は誰であれ端的な普遍的真すなわち神を見るからである。アウグスティヌスが『三位一体論』で言う<sup>103)</sup>ように、そして後で明らかにされる<sup>104)</sup>であろうように。しかし、(B2 2) 第二の仕方では、言われたように<sup>104)</sup>、純正真理のみが〔第一真理において〕見られる。そして、神においては高貴さに属し被造物にも適合する真・美・善・等々を認識するこれら二つの仕方は注目されなければならない。なぜなら、それら〔二つの仕方〕について、アウグスティヌスが様々な箇所<sup>105)</sup>で語っているからである。ある時は、一つの仕方に則して、善・美・真といったものは、創造主における善・美・真をとおしてでなければ認識されないといい、またある時は、もう一つの仕方に則して言う。しかし、この問題についての彼のすべての説明は、それら〔二つ〕の仕方のどちらかに寄っている。

二つの反対異論は、何らかの真理が神の特別な照明なしに人間によって知られ認識されうるということはよく証明しているが、純正真理〔が神の特別な照明なしに人間によって知られ認識されうるということ〕は証明していない。

あるいは、もし望むなら次のように言うこともできる。そして、ひょっとするとこちらの方が良いかもしれない。上述のように<sup>106)</sup>、人間は、援助してくれる神の範型の超自然的照明なしに、純粹に自然本性的に、知性によって事物について認識することができるのは、真なるもののみである。この知性は感覚に従うが、感覚より明晰に真なるものを識別する。なぜなら、アヴィセンナが『形而上学』で言うように、《知性は、表面的に外面しか知覚しない感覚よりも、より精緻に把握し、受け取るものの実体により多く注入される<sup>107)</sup>》からである。しかし、〔人間は〕事物の真理それ自体を知覚することは、多少に関わらず、神の範型の照明なしには決してできない。そして、事物から抽象された範型は、それ自体ではこのことに十分ではなく、むしろ神の範型によって、事物についての概念は、事物から受け取られた範型にそくして規定されなければならない。こうして、もし、その概念において純正かつ明晰な真理を見ようとすれば、知性は神の範型によってもっと明るく照明されなければならない。また、もし、どんなに微かにであろうと、何らかの仕方〔見ようとす〕ならば、〔知性は〕それ〔神の範型〕によって微かな仕方〔で〕照明されなければならない。そして、もし、〔知性が〕それ〔神の範型〕によってまったく照明されなければ、真理それ自体をまったく見ることはないだろう。こうして我々は次のように言う。この世の普通の人生行路において、そのような範型の現前は理由なしに授与されるけれども、また魂の自然本性的能力は、その自然本性的活動によってそれ〔神の範型〕に到達するようには秩序づけられていないけれども、神の側に関する限り、それ〔神の範型〕はすべてのものに平等に現前している。したがって、各人は各々の情態と能力に応じてそれ〔神の範型〕によって照明される。ただし、突出した悪意のためにその報いとしてある人からそれ〔神の範型〕がまったく取り除かれ、いかなる真理も見ることができなくなり、すべての可認識的なものにおいて全面的に愚化されるのでなければ、である。ちょうど、ある特定のものにおいて〔神の範型が取り除かれ〕そこに真理を見ることはなくその報いと

tatem omnino videat, sed totaliter infatuetur in omni cognoscibili, ut in alio determinato ne videat veritatem in eo, sed dilabatur in errorem quem meretur — et sic secundum determinationem AUGUSTINI nulla veritas videtur omnino nisi in prima veritate —, et quod hoc est naturale creaturae rationali, quod solum possit ex puris naturalibus in cognitionem eius quod verum est de re, et non ultra in cognitionem ipsius veritatis nisi per illustrationem divini exemplaris, et hoc propter eminentiam actus intelligendi ipsam veritatem, ut dictum est supra.

Et secundum hanc viam ad primum argumentum in oppositum, quod «nisi homo ex puris naturalibus posset in cognitionem veritatis, frustra eam investigaret», dicendum quod sine illa illustratione nec valeret homo eam investigare in tantum ut ad veritatis notitiam ex puris naturalibus investigando pervenire posset. Sed hic solum valet cum adiutorio illius illustrationis, sic existente anima rationali in naturalibus creata.

Ad secundum, quod «homo naturaliter scire desiderat, ergo potest scire ex puris naturalibus», dicendum quod verum est, non tamen sic ut ipsam veritatem ex puris naturalibus videat, sicut dictum est. Naturali enim appetitu bene desiderat homo scire etiam illa quae sunt supernaturaliter cognoscenda, quae tamen secundum communem illustrationem a divino exemplari sine illustratione specialiori non posset attingere, ut infra videtur.

て誤謬に陥る場合のように、である。こういうわけで、アウグスティヌスの結論によれば<sup>108)</sup>、いかなる真理も第一真理においてでなければけっして見られない。そして、理性的被造物にとって自然なことは、純粋に自然本性的に〔到達〕しうるのは、事物についての真なるものの認識までであって、神の範型の照明によってでなければ、その上さらに事物の真理の認識にまでは〔到達しえない〕、ということである。このことは、上述のように、真理を知性認識するという活動の卓越性のゆえなのである。

こうして、第1反対異論《人間が自然本性的に真理の認識に到達できないなら、真理の探究は虚しいものとなるだろう<sup>109)</sup>》に対して、次のように言わなければならない。その照明なしには、人間は純粋に自然本性的に探求することによって真理の知に到達することができる程度にまで真理を探究することもできないだろう。理性的魂は自然本性的なものの中に創造されこのように存在しているので、その照明の援助によってのみこのことは可能となるのである。

第2反対異論《人間は自然本性的に知ることを欲する。それゆえ、純粋に自然本性的に知ることが可能である<sup>110)</sup>》に対して、次のように答えなければならない。たしかにその通りであるが、言われたように、このことは純粋に自然本性的に真理それ自体を見るという意味ではない。じっさい、人間は超自然的に知られるべき事柄さえも自然本性的欲求によって知りたいと欲するが、そのような事柄は、後に見られるように<sup>111)</sup>、もっと特別な照明なしに、神の範型からくる普通照明によって到達することはできないのである。 (完)

#### 注

1) *Henrici de Gandavo Quaestiones ordinariae (Summa)*, art.1-5, ed. Gordon A. Wilson (Ancient and Medieval Philosophy. De Wulf-Mansion Centre. Series II: Henrici de Gandavo *Opera Omnia*, vol.21 ), Leuven: Leuven University Press, 2005, pp.3-28. “The Latin text is copyrighted and is published here with the permission of the editor, and with the knowledge and consent of the De Wulf-Mansion Center and Leuven University Press.”

67) cf. *Henrici de Gandavo Quaestiones ordinariae (Summa)*, a.1, q.3: si homo cognoscat lucem divinam qua cognoscit alia.

68) Augustinus, *De libero arbitrio*, II, c.12, n.34 (CCSL): Hanc ergo ueritatem de qua iam diu loquimur et in qua una tam multa conspicimus, excellentiorem putas esse quam mens nostra est an aequalem mentibus nostris an etiam inferiorem? Sed si esset inferior, non secundum illam, sed de illa iudicarem, sicut iudicamus de corporibus quia infra sunt, et dicimus ea plerumque non tantum ita esse uel non ita, sed ita uel non ita esse debere, sic et de animis nostris non solum ita esse animum nouimus, sed plerumque etiam ita esse debere. Et de corporibus quidem sic iudicamus, cum dicimus ‘minus candidum est quam debuit’ aut ‘minus quadrum’ et multa similiter; de animis uero, ‘minus aptus est quam debet’ aut ‘minus lenis’ aut ‘minus uehemens’, sicut nostrorum morum se ratio tulerit.

**Et iudicamus haec secundum illas interiores regulas ueritatis quas communiter cernimus, de ipsis uero nullo modo quis iudicat.** Cum enim quis dixerit aeterna temporalibus esse potiora

aut septem et tria decem esse, nemo dicit ita esse debuisse, sed tantum ita esse cognoscens non examinatur corrigit, sed tantum laetatur inuentor.

Si autem esset aequalis mentibus nostris haec ueritas, mutabilis etiam ipsa esset. Mentis enim nostrae aliquando eam plus uident aliquando minus et ex hoc fatentur se esse mutabiles, cum illa in se manens nec proficiat cum plus a nobis uidetur nec deficiat cum minus, sed integra et incorrupta et conuersos laetificet lumine et auersos puniat caecitate. Quid, quod etiam de ipsis mentibus nostris secundum illam iudicamus, cum de illa nullo modo iudicare possimus? Dicimus enim, 'minus intellegit quam debet' aut 'tantum quantum debet intellegit'. **Tantum autem mens debet intellegere quantum propius admoueri atque inhaerere potuerit incommutabili ueritati. Quare si nec inferior nec aequalis est, restat ut sit superior atque excellentior.** 「われわれはこの真理について長い間語り、この一つのものの中に多くの真なるものを認めてきたのであるが、君はそれをわれわれの精神よりもすぐれていると思うか。それとも等しいとか劣っているとか思うだろうか。しかし、真理がわれわれよりも劣っているとすれば、われわれは真理に従って判断するのではなく、むしろ真理について判断することになる。ちょうど、物体がわれわれよりも劣っているので、われわれはそれについて判断し、それがこうだとか、こうではないとかいい、さらにこうあるべきとか、こうあるべきではないと、しばしばいうようなものである。魂についてもまた、われわれはこうだと知っているだけでなく、しばしばこうあるべきだということも知っている。実際、われわれは物体についてそのように判断し、あるべきほどには白くないとか、四角でないとか、その他そうしたことをいろいろという。魂については、あるべきほどには有能でないとか、穏やかでないとか、熱心でないとかと、われわれの道徳的基準に照らしていう。われわれはこうした判断を、共通に知られる真理の内的規則にもとづいて下さるが、その規則自体について判断するのでは決してない。なぜなら、永遠のものが時間的なものにまさり、七プラス三が一〇であるというとき、そうあるべきだというのではなく、ただそうだと認めるのである。つまり、人は検察官として訂正するのではなく、ただ発見者として喜ぶのである。

ところで、真理がわれわれの精神と等しいのであれば、真理自体も可変的であるだろう。なぜなら、われわれの精神は、ある時は真理をよく見るが、ある時は殆ど見ないのであって、その点で自らが可変的であることを示しているからである。しかし、真理は自らの中にとどまるゆえ、われわれによってよく見られたために増大したり、少ししか見られなかったために減少したりはせず、完全であって朽ちることがないのである。そして、自分に向かう者を光によって喜ばせ、自分に背く者を盲目にして罰する。それゆえ、われわれはこの真理に従ってわれわれの精神そのものを判断するが、真理そのものについて判断することは決してできない。われわれは、精神が知解すべきことを殆ど知解していないとか、よく知解しているとかいう。しかし、**精神は不変の真理に近づき、それに固着することができるなら、いっそうよく知解しうるのである。それゆえ、真理がわれわれの精神以下でなく、等しくもないならば、それよりも高く、すぐれていることになるであろう**。『自由意志』泉治典訳、『アウグスティヌス著作集 第3巻 初期哲学論集 (3)』教文館、1989、pp.114-115。アウグスティヌス引用箇所日本語訳は、特記しないかぎり『アウグスティヌス著作集』教文館を参照した。なお、アウグスティヌスからの引用箇所の特定について平野和歌子さん(京大大学院文学研究科博士課程)のお世話になった。ここに記して感謝する。

69) cf. Thomas Aquinas, *Quaestiones disputations de veritate*, q.1, a.1, c. [CORPUS THOMISTICUM, *Sancti Thomae de Aquino Quaestiones disputatae de veritate*, Textum adaequatum Leonino 1970 edito emendatum ex plagulis de prelo ac translatum a Roberto Busa SJ in taenias magneticas denuo

recognovit Enrique Alarcón atque instruxit. ] : Omnis autem cognitio perficitur per assimilationem cognoscentis ad rem cognitam, ita quod assimilatio dicta est causa cognitionis: sicut visus per hoc quod disponitur secundum speciem coloris, cognoscit colorem. Prima ergo comparatio entis ad intellectum est ut ens intellectui concordet: quae quidem concordia adaequatio intellectus et rei dicitur; et in hoc formaliter ratio veri perficitur. **Hoc est ergo quod addit verum super ens, scilicet conformitatem, sive adaequationem rei et intellectus;** ad quam conformitatem, ut dictum est, sequitur cognitio rei. Sic ergo entitas rei praecedit rationem veritatis, sed cognitio est quidam veritatis effectus. Secundum hoc ergo veritas sive verum tripliciter invenitur diffiniri. Uno modo secundum illud quod praecedit rationem veritatis, et in quo verum fundatur; et sic Augustinus diffinit in Lib. Solil.: *verum est id quod est*; et Avicenna in sua Metaphysic.: *veritas cuiusque rei est proprietas sui esse quod stabilitum est ei*; et quidam sic: *verum est indivisio esse, et quod est*. Alio modo diffinitur secundum id in quo formaliter ratio veri perficitur; et sic dicit Isaac quod **veritas est adaequatio rei et intellectus;** et Anselmus in Lib. de veritate: *veritas est rectitudo sola mente perceptibilis*. Rectitudo enim ista secundum adaequationem quamdam dicitur, et philosophus dicit IV Metaphysicae, quod diffinientes verum dicimus cum dicitur esse quod est, aut non esse quod non est. Tertio modo diffinitur verum, secundum effectum consequentem; et sic dicit Hilarius, quod *verum est declarativum et manifestativum esse*; et Augustinus in Lib. de vera Relig.: *veritas est qua ostenditur id quod est*; et in eodem libro: *veritas est secundum quam de inferioribus iudicamus*. 「ところで、あらゆる認識は認識者が認識対象事物への類似化によって完成され、この類似化が認識の原因となる。ちょうど、視覚が、色の形象によって態勢づけられることによって色を認識するように。それゆえ、有の知性に対する第一の関係は、有が知性に合致するということであり、この合致が知性ともとの対等と呼ばれる。そして、このことにおいて、真のラチオが完成される。真が有に付加するのはまさにこのこと、すなわち、ものと知性の合致ないし対等なのである。既に述べられたように、この合致に事物の認識は従う。こうして、事物の有性が真理のラチオに先行し、認識は真理の結果なのである。したがって、以上のことから、真理や真は三通りに定義されているのが見られる。第一に、真理のラチオに先行し、そのうちに真が見いだされるものに関して。この意味で、アウグスティヌスは『ソリロキア』において『真とは有るところのものである』と定義し、アヴィセンナは『形而上学注解』において『事物に属する真理とはその事物にとって不動のエッセの固有性である』と〔定義し〕、またある人々は『真とはエッセと有あるものの不可分性である』と〔定義する〕。第二に、真のラチオを形相的に完成するものに関して定義される。この意味で、イサクは『真理はものと知性の対等である』と言い、アンセルムスは『真理論』で『真理はただ心においてのみ知覚されうる正しさである』と言う。じっさい、この正しさはある種の対等に関して語られ、アリストテレスが『形而上学』第IV巻で『有るものが有ると言われ、ないものがないと言われるとき、我々は真を定義している』と言っている。第三に、真は後続する結果に関して定義される。この意味で、ヒラリウスは『真はエッセを明言し明示する』と言い、アウグスティヌスは『真の宗教』で『真理はそれによって有るものが示されるものである』『真理は我々が下等なものどもについて判断するための規準である』と言う。アクィナス『真理論』からのこの引用箇所の日本語訳は訳者のものである。

70) Augustinus, *De libero arbitrio*, II, c.17, n.45 (CCSL): Omnis enim res mutabilis etiam formabilis sit necesse est. Sicut autem mutabile dicimus quod mutari potest, ita formabile quod formari potest appellauerim. **Nulla autem res formare se ipsam potest, quia nulla res potest dare quod**

**non habet**, et utique ut habeat formam formatur aliquid. 「可変的なものはみな、必ず形をもちうるものである。われわれは変化されうるものを「変化を受け入れうるもの(可変的なもの)」mutabileと呼ぶように。形づくられうるものを「形をもちうるもの」formabileと呼ぶ。しかし、どんなものも自分自身で形を与えることはできない。なぜなら、どんなものも自分のもたないものを自分に与えることはできないからである。そして、あるものが形をもつということは、それが形づくられるということである」。『自由意志』泉治典訳、1989、p.127。ヘンリクススのテキストの下線部分 anima de se sit mutabilis a veritate in falsitatem, et ita quantum est de se non sit veritate cuiusquam rei informata, sed informabilis, が大幅に異なる。

71) cf. *Henrici de Gandavo Quaestiones ordinariae Summa*, a.1, q.2 [ed. by Wilson, p.44, l.316–p.45, l.328]

72) cf. Augustinus, *De libero arbitrio*, II, c.16–17, n.44–45 (CCSL): Si ergo quidquid mutabile aspexeris, uel sensu corporis uel animi consideratione capere non potes, nisi aliqua numerorum forma teneatur, qua detracta in nihil recidat, noli dubitare, ut ista mutabilia non intercipientur, sed dimensis motibus et distincta uarietate formarum quasi quosdam uersus temporum peragant, esse aliquam formam aeternam et incommutabilem, quae neque contineatur et quasi diffundatur locis neque protendatur atque uarietur temporibus, per quam cuncta ista formari ualeant et pro suo genere implere atque agere locorum ac temporum numeros. … (注70の箇所) … Quapropter quaelibet res si quam habet formam, non ei opus est accipere quod habet; si qua uero non habet formam, non potest a se accipere quod non habet. Nulla ergo res, ut diximus, formare se potest. Quid autem amplius de mutabilitate corporis et animi dicamus? superius enim satis dictum est. Conficitur itaque, ut corpus et animus forma quadam incommutabili et semper manente formentur. 「身体の感覚や精神の思惟によって、見うるすべての可変的なものをとらえることができたならば、それは可変的なものが、何らかの数の形相によって保持されているからにはかならない。これが取り去られるなら、可変的なものは無に帰すであろう。だが君は、永遠不変の形相があることを疑ってはならない。可変的なものはこれによって中断を免れ、測定される運動の中で形相のさまざまな相違をもちつつ、いわば時間のあぜ道を最後まで歩みとおすのである。その永遠の形相は、場所の中におかれていわば分散されず、また時間と一緒に伸びたり変化したりもしない。だが、すべての可変的なものはこれによって形づくられることができ、それぞれの類に従って一定の分量の時間空間をみだし占領することができるのである。… (注70の箇所) …。したがって、すでに形をもつものは何でも、そのもつものを受け取る必要はない。しかしもたないとすると、もたないものを自分から受け取ることはできない。それゆえ、今いったように、何ものも自分で形づくることはできないのである。魂と身体の変性についてこれ以上いふべきことがあるだろうか。われわれはもう十分に述べた。そこで、**魂も身体も、ある不変で常にありつづける形相によって形づくられる、と結論される**」。『自由意志』泉治典訳、1989、pp. 126–217。

73) Augustinus, *De vera religione*, c.36, n.66 (CCSL): Cetera illius unius similia dici possunt, in quantum sunt, in tantum enim et uera sunt. Haec est autem ipsa eius similitudo et ideo ueritas. **Vt enim ueritate sunt uera quae uera sunt, ita similitudine similia sunt quaecumque similia.** Vt ergo ueritas forma uerorum est, ita similitudo forma similium. Quapropter quoniam uera in tantum uera sunt, in quantum sunt, in tantum autem sunt, in quantum principalis unius similia sunt, ea forma est omnium quae sunt, quae est summa similitudo principii et ueritas est, quia sine ulla dissimilitudine est. 「その他のものは存在する限りにおいて、彼の一つなるものに似ていると言われ



る。なぜなら、その限りにおいて、それは真理であるからである。しかしながら、真理は一つなるものへの類似性そのものなのであり、それゆえに真理なのである。なぜなら、真理であるところのものは、真理によって真理であるように、似ているものは類似によって似ているのである。それゆえ、真理は真なるものの形相であるように、類似性は類似しているものの形相である。したがって、真なるものは存在する限りにおいて真であり、根源的な一つに類似している限りにおいて、それらは存在するのである。根本原理に最高に類似しているものは、存在しているところのすべてのものの形相であり、真理である。なぜなら、そこにはいかなる非類似性も存しないからである」。『真の宗教』茂泉昭男訳、1979、p.353。下線部 Vt enim, quae, quaecumque similia は、ヘンリクスのテキストにおいては、Sicut, quaecumque, simillia となっている。

74) Augustinus, *De Trinitate*, XI, c.5, n.8 (CCSL): Non sane omne quod in creaturis aliquo modo simile est deo etiam eius imago dicenda est, sed illa sola qua superior ipse solus est. **Ea quippe de illo prorsus exprimitur inter quam et ipsum nulla interiecta natura est.** 「被造物の中で何らかの仕方神に似ているすべてが神の似像と言われるのではなく、神ご自身だけがそれにまさるあの精神だけが似像なのである。実際、神との間に他のどんな本性もおかれていないものだけが、神の直接の写しを持つのである」。『三位一体』泉治典訳、2004、p. 317。下線部 illo, ipsum は、ヘンリクスのテキストにおいては、illa, ipsam となっている。

75) Augustinus, *op.cit.*, XIV, c.15, n.21 (CCSL): **Vbinam sunt istae regulae scriptae, ubi quid sit iustum et iniustus agnoscit,** ubi cernit habendum esse quod ipse non habet? Vbi ergo scriptae sunt, **nisi in libro lucis illius quae ueritas dicitur unde omnis lex iusta describitur et in cor hominis qui operatur iustitiam non migrando sed tamquam imprimendo transfertur, sicut imago ex anulo et in ceram transit et anulum non relinquit?** Qui vero non operatur, et tamen videt quid operandum sit, ipse est qui ab illa luce avertitur, a qua tamen tangitur. 「それでは、その規範はどこに記されているだろうか。不義な者はどこで正義とは何かを認識できるだろうか。またどこで、自分の持たないものを持つべきであると知りうるだろうか。真理と呼ばれるあの光の書以外のどこにそれが書かれているだろうか。正しい法はすべてそこから書き写され、正義を行う人の心の中に移される。これは場所的移動によってでなく、一種の刻印によるのであり、いわば〔指輪についた〕印章が蜜蝋の中に移っても指輪自体は残っているような具合である。正義を行わないが何をなすべきかを知っているような人は、あの光に背を向けつつも既に触れられた人である」。『三位一体』泉治典訳、2004、pp.427-428。下線部 ubi, et iniustus agnoscit, hominis qui operatur iustitiam は、ヘンリクスのテキストでは quibus, quid iniustum agnoscitur, hominis となっている。

76) Augustinus, *In Iohannis evang. tract.*, tract. 39, n.8 (CC lat. 36, p.349, 21-29; PL 36, 1685) .

77) cf. Augustinus, *Sermo* 341, c.6, n.8 (PL 39, 1498) .

78) Augustinus, *De Trinitate*, IX, c.6, n.10-11 (CCSL): **Viget et claret desuper iudicium ueritatis ac sui iuris incorruptissimis regulis firmum est, et si corporalium imaginum quasi quodam nubilo subtexitur, non tamen involvitur atque confunditur. Sed interest utrum ego sub illa uel in illa caligine tamquam a caelo perspicuo secludar, an sicut in altissimis montibus accidere solet inter utrumque aere libero fruens et serenissimam lucem supra et densissimas nebulas subter aspiciam.** 「真理の判断は感性的な想像物を超えていきいきと輝き、自らの法則の公平な規則でもって堅固なものとしてある。それは雲のような物体の想像物によって覆われるとしても、決してその中に巻き込まれて解体することはない。しかしもちろんのこと、私が明るい天空から閉め出されて、あの霧の下にかその中にかいるのと、高い山で起こるように天空と雲との間で

自由な空気を享受しつつ、上方に澄んだ光を見、下方に密雲を見るのとは異なるのである」。『三位一体』泉治典訳、2004、p. 268。下線部 *Viget et, non tamen involvitur atque confunditur* は、ヘンリクスのテキストにはない。

79) Augustinus, *De Trinitate*, IX, c.7, n.12 (CCSL): **In illa igitur aeterna ueritate** ex qua temporalia facta sunt omnia formam secundum quam sumus et secundum quam vel in nobis vel in corporibus vera et recta ratione aliquid operamur **uisu mentis aspicimus, atque inde conceptam rerum ueracem notitiam tamquam uerbum apud nos habemus** et dicendo intus gignimus, nec a nobis nascendo discedit。「それゆえ、すべての時間的なものがそれにもとづいて造られたあの永遠の真理の中に、私たちは精神の目をもって形相を見る。私たちはこの形相に従って存在し、またこの形相に従って私たち自身の中でか物体の中でか、真にして正しい理性をもってある働きをなすのである。そして私たちはこの形相から事物の真の知識を〔精神の中に〕孕み、これを内的に語ることで生み出す言葉のようなものとして私たちの許に置く。その言葉は生み出されたあと私たちから離れるのではない」。『三位一体』泉治典訳、2004、pp. 269-270。下線部 *uisu mentis aspicimus* は、ヘンリクスのテキストでは、*uisa mentis conspicimus* となっている。

80) Augustinus, *De Trinitate*, XII, c.14, n.23 (CCSL): De his ergo sermo cum fit, eum scientiae sermonem puto discernendum a sermone sapientiae ad quam pertinent ea quae nec fuerunt nec futura sunt sed sunt, et propter eam aeternitatem in qua sunt et fuisse et esse futura esse dicuntur sine ulla mutabilitate temporum. Non enim sic fuerunt ut esse desinerent aut sic futura sunt quasi nunc non sint, sed idipsum esse semper habuerunt, semper habitura sunt. Manent autem non tamquam in spatiis locorum fixa ueluti corpora, sed in natura incorporali sic intellegibilia praesto sunt mentis aspectibus sicut ista in locis uisibilia uel contrectabilia corporis sensibus. **Non autem solum rerum sensibilibium in locis positarum** sine spatiis localibus manent intellegibiles incorporalesque rationes, uerum etiam motionum in temporibus transeuntium sine temporali transitu stant etiam ipsae utique intellegibiles, non sensibiles。「それゆえ、これらのことについての言葉は知識のそれであって、知恵のそれとは区別されなければならないと思われる。この知恵には、かつてなかったもの、将来ないであろうものではなく、常にあるものがぞくしている。それらのものはそれらのものを保つ永遠性のゆえに、時間のどんな変化もなしに、かつて存在し、今存在し、将来存在するであろうと言われる。それらのものは、いつか存在しなくなるものとして存在していたのではなく、今まだ存在しないやがて存在するであろうというのでもなく、常に同じ存在を持ったし、また持つであろうものである。それらのものは物体のように場所の中に固定されておらず、非物体的本性を持ち、ちょうど物体が身体感覚に対して可視的・可触的であるように、知性的なものとして精神の視野に現前している。場所を占める感覚的な事物の知性的で非物体的な根拠は、場所を占めることなしに存在し、同じく時間を通して過ぎ行く運動の知性的で非感性的な根拠もまた、時間の中で測られることなしに存在する」。『三位一体』泉治典訳、2004、pp. 351-352。

81) cf. *Henrici de Gandavo Quaestiones ordinariae Summa*, a.1, q.1 [ed. by Wilson, p.23, l.339-p.26, l.404]; 加藤雅人訳「人間は何かを知りうるか」(2) —ガンのヘンリクス『定期討論のスママ』a.1, q.1—、『外国語学部紀要』第8号、関西大学外国語学部、2013年3月、pp.151-178 (とくに、pp.165-167)。

82) Aristoteles, *Metaphysica*, II, c.1, 993b23-30: οὐκ ἴσμεν δὲ τὸ ἀληθὲς ἄνευ τῆς αἰτίας: ἕκαστον δὲ μάλιστα αὐτὸ τῶν ἄλλων καθ' ὃ καὶ τοῖς ἄλλοις ὑπάρχει τὸ συνώνυμον (οἷον τὸ πῦρ θερμότατον: καὶ γὰρ τοῖς ἄλλοις τὸ αἶπιον τοῦτο τῆς θερμότητος): ὥστε καὶ ἀληθέστατον τὸ τοῖς ὑστέροις



αἴτιον τοῦ ἀληθεῖσιν εἶναι. διὸ τὰς τῶν αἰεὶ ὄντων ἀρχὰς ἀναγκαῖον αἰεὶ εἶναι ἀληθεστάτας (οὐ γὰρ ποτε ἀληθεῖς, οὐδ' ἐκείναις αἰτίον τί ἐστί τοῦ εἶναι, ἀλλ' ἐκείναι τοῖς ἄλλοις), ὥσθ' ἕκαστον ὡς ἔχει τοῦ εἶναι, οὕτω καὶ τῆς ἀληθείας. 「さてわれわれは、物事の原因を知っていないかぎり、その真を知っているものとは認めない。ところで、同じ名前〔性質〕を有するものどものうち、或るものの性質がそれによって他のものどもにもその同じ名前が属するに至るような性質であるとき、この或るものが他のいずれよりも最も高度にこの性質を有している。たとえば火は、最も熱いものであるが、それは火が他のすべてにとってそれらの熱さの原因であるからである。だからそのようにまた、派生的に真であるものどもにとっては、それらの真理性の原因たるものはそれ自ら最も高度に真なるものである。それゆえに、常に〔永遠的に〕存在するものどもの原理は、それ自らが常に最も真なるものであること必然である、一なぜなら、それはたんに或るときには真であるというようなものではなく、またそれにとって他のなものかがその存在の原因として存するというようなものでもなくて、かえってそれ自らが他のものどもにとってそれらの存在の原因なのであるから、—こうして、各々のものはそれぞれその有する存在性の度に応じて、その程度の真理性をもっている」。『形而上学』出隆訳、『アリストテレス全集』岩波書店、1968、pp.52-53。

83) Augustinus, *Contra Academicos*, III, c.19, n.42 (CCSL): Itaque nunc philosophos non fere uidemus nisi aut Cynicos aut Peripateticos aut Platonicos, et Cynicos quidem, quia eos uitae quaedam delectat libertas atque licentia. **Quod autem ad eruditionem doctrinamque attinet et mores, quibus consulitur animae, quia non defuerunt acutissimi et solertissimi uiri, qui docerent disputationibus suis Aristotelem ac Platonem ita sibi concinere, ut imperitis minusque attentis dissentire uideantur, multis quidem saeculis multisque contentioneibus, sed tamen eliquata est, ut opinor, una uerissimae philosophiae disciplina. Non enim est ista huius mundi philosophia, quam sacra nostra meritissime detestantur, sed alterius intellegibilis, cui animas multiformibus erroris tenebris caecatas et altissimis a corpore sordibus oblitae nunquam ista ratio subtilissima reuocaret, nisi summus Deus populari quadam clementia diuini intellectus auctoritatem usque ad ipsum corpus humanum declinaret atque submitteret, cuius non solum praeceptis sed etiam factis excitatae animae redire in semetipsas et respiscere patriam, etiam sine disputationum concertatione potuissent.** 「こういうわけで今日わたしたちは、キュニコス派かペリパトス派かプラトン派以外にはまったく哲学者をみないのである。キュニコス派を挙げたのは、彼らが生活のある種の自由と余暇を愛したからである。しかし学説と教義と習俗—魂はこれらのものによって導かれるが—に関しては、思うに、唯一の真の哲学の学問がついに濾し出されるに至っている。もちろん、以上の三つに関しては頭脳鋭敏ですぐれた人々もないわけではなく、彼らは、プラトンとアリストテレスとは互いに十分一致しているのに、未熟で不注意な人々には違っていると思われるのだ、と議論して教えたので、それが濾し出されるまでには長い年月と多くの葛藤を経たのである。それがなぜ唯一の真の学問といふかといえ、それはわたしたちの聖なる教えがきわめて当然にも非難しているこの世の哲学ではなく、別の英知界の哲学だからである。だが、この哲学のきわめて精密な論拠でさえも、さまざまな形の誤謬の闇によって盲目となり、身体によってひどく汚れている魂をこの哲学のもとへ呼びもどすことは、至高の神が人々への憐れみによって神的知性の權威を人間の身体へと向けたまい、そこまで降りたまわなければ、不可能であろう。魂はこの神的知性の戒めばかりでなく、さらに行爲によっても鼓舞されて自分自身へ還り、議論の言い争いによらないでも、故郷を仰ぎ見ることができであろう」。『アカデミア派駁論』清水正照訳、1979、pp.150-151。なお、下線部 quia, quidem

saeculis multisque, nostra meritissime, et altissimis a corpore sordibus oblitus, atque submitteret, et resipiscere patriam は、ヘンリクスのテキストにはない。また、下線部 et, ac, una, multiformibus, auctoritatem, excitatae は、ヘンリクスのテキストでは、ac, et, vera, multiformis, auctorem, excaecatae となっている。

84) Augustinus, *Epist.*, 118, 20 (CSEL 34, p.684, 10-13) .

85) Augustinus, *op.cit.*, 147, 42 (CSEL 44, p.316, 14-16) .

86) Augustinus, *Contra Academicos*, III, c.6, n.13 (CCSL): Sunt enim istae imagines, quae consuetudine rerum corporalium per istos quibus ad necessaria huius vitae utimur sensus, nos etiam cum veritas tenetur, et quasi habetur in manibus, decipere atque illudere moliuntur. 「わたしたちは形体的事物に慣れてるものだから、この世の生活に必要なもののためにわたしたちが使う感覚を通して一わたしたちが真理を把み、いわば自分の手に持っている場合でさえも一わたしたちを罫でとらえ、たぶらかそうと懸命になっているもの、それこそ、思うに、この姿像なのである」。『アカデミア派駁論』清水正照訳、1979、p.106。下線部 Sunt enim istae imagines と per istos quibus ad necessaria huius vitae utimur sensus は、ヘンリクスのテキストにはない。

87) Augustinus, *Epist.*, 147, 29 (CSEL 44, p.304, 4-7) .

88) cf. *Henrici de Gandavo Quaestiones ordinariae (Summa)*, a.1, q.2 [ed. by Wilson, p.31, l.45-p.32, l.67] ; 加藤雅人訳「神の照明なしに人間は何かを知りうるか」(1) —ガンのヘンリクス『定期討論のスンマ』a.1, q.2—、『外国語学部紀要』第9号、関西大学外国語学部、2013年10月、p.149。

89) cf. *Henrici de Gandavo Quaestiones ordinariae (Summa)*, a.1, q.2 [ed. by Wilson, p.50, l.425-p.52, l.464] ; 加藤雅人訳「神の照明なしに人間は何かを知りうるか」(2) —ガンのヘンリクス『定期討論のスンマ』a.1, q.2—、『外国語学部紀要』第10号、関西大学外国語学部、2014年3月、pp.120-123。

90) Augustinus, *Epist.*, 147, 18 (CSEL 44, p.289, 12) .

91) Augustinus, *De Trinitate*, IV, c.15, n.20 (CCSL): Hinc enim sibi purgationem isti uirtute propria pollicentur quia nonnulli eorum potuerunt aciem mentis ultra omnem creaturam transmittere et lucem incommutabilis ueritatis quantulumcumque ex parte contingere, quod christianos multos ex fide interim sola uiuentes nondum potuisse derident. Sed quid prodest superbienti et ob hoc erubescenti lignum conscendere de longinquo prospicere patriam transmarinam? Aut quid obest humili de tanto interuallo non eam uidere in illo ligno ad eam uenienti quo dedignatur ille portari? 「彼らは高慢にも自分の力でもって清められると主張するが、そのわけは、彼らの中である者は精神の目を被造物全体の涯まで届かせることができ、たとえわずかでも真理の光に触れることができたからである。そこで彼らは、今はまだ信仰のみによって生きる多くのキリスト者にはこのことをなしえないと言って嘲るのである。しかし高慢な人にとって、またそのために〔十字架の〕木の船に乗るのを恥じる人にとっては、海の向こうにある故国を遠くから望み見ることは、何の役にも立たないであろう。けれども、その高慢な人が運ばれることを蔑む木の船に乗って故国に行く謙虚な人にとっては、このように遠くから故国を見ることは、どうして不都合であるだろうか。『三位一体』泉治典、2004、p.151。下線部 nonnulli eorum, ex parte, christianos multos ex fide interim は、ヘンリクスのテキストでは、Sunt nonnulli qui, parte, Christianos ex fide となっている。

92) Augustinus, *Soliloquia*, I, c.13, n.23 (PL,p.881): *R.* Prorsus tales esse amatores sapientiae decet. Tales quaerit illa cuius vere casta est, et sine ulla contaminatione conjunctio. Sed non ad eam una

via pervenitur. Quippe **pro sua** quisque **sanitate** ac firmitate comprehendit illud singulare ac verissimum bonum. Lux est quaedam ineffabilis et incomprehensibilis mentium. Lux ista vulgaris nos doceat quantum potest, quomodo se illud habeat. 「[理性の発言] まったくそういう人こそ知恵を愛する者にふさわしい。知恵と結び合わされるのには真に清らかで一点の汚れもあってはならないのであって、そういう人をこそ知恵は求めているのだ。しかし知恵との結合に到る途は一つしかないわけでもない。いかなる人であれ、おのおのその〔精神の〕健全さと堅固さとに**応じて**この比べるものもない真実の善を捉えるのはむろんのことである。[人々の]精神がもっている言表すべからざる捉えがたいある種の光〔による途のことをわたしは言っているのだ〕。わたしたちの普通の光でも、あの善がどのような状態にあるのかを、可能な限りは、わたしたちに教えることが許されているのだよ」。『ソリロキア』清水正照訳、1979、p. 370。

93) cf. *Henrici de Gandavo Quaestiones ordinariae (Summa)*, a.1, q.2 [ed. by Wilson, p.29, ll.7-8]; 加藤雅人訳「神の照明なしに人間は何かを知りうるか」(1) —ガンのヘンリクス『定期討論のスンマ』a.1, q.2—、『外国語学部紀要』第9号、関西大学外国語学部、2013年10月、p.147。

94) cf. *Henrici de Gandavo Quaestiones ordinariae (Summa)*, a.1, q.2 [ed. by Wilson, p.35, ll.121-125]; 加藤雅人訳「神の照明なしに人間は何かを知りうるか」(1) —ガンのヘンリクス『定期討論のスンマ』a.1, q.2—、『外国語学部紀要』第9号、関西大学外国語学部、2013年10月、p.153。

95) cf. *Henrici de Gandavo Quaestiones ordinariae (Summa)*, a.1, q.2 [ed. by Wilson, p.51, l.447-p.52, l.464]; 加藤雅人訳「神の照明なしに人間は何かを知りうるか」(2) —ガンのヘンリクス『定期討論のスンマ』a.1, q.2—、『外国語学部紀要』第10号、関西大学外国語学部、2014年3月、pp.122-123。

96) cf. *Henrici de Gandavo Quaestiones ordinariae (Summa)*, a.1, q.2 [ed. by Wilson, p.29, ll.11-12]; 加藤雅人訳「神の照明なしに人間は何かを知りうるか」(1) —ガンのヘンリクス『定期討論のスンマ』a.1, q.2—、『外国語学部紀要』第9号、関西大学外国語学部、2013年10月、p.147。

97) Augustinus, *De Trinitate*, IX, c.10, n.15 (CCSL): Recte ergo quaeritur utrum omnis notitia uerbum an tantum amata notitia. Nouimus enim et ea quae odimus, sed nec concepta nec parta dicenda sunt animo quae nobis displicent. Non enim omnia quae quoquo modo tangunt concipiuntur, ut tantum nota sint non tamen uerba dicantur ista de quibus nunc agimus. Aliter enim dicuntur uerba quae spatia temporum syllabis tenent siue pronuntientur siue cogitentur; aliter omne quod notum est uerbum dicitur animo impressum quamdiu de memoria proferri et definiri potest, quamuis res ipsa displiceat; aliter cum placet quod mente concipitur. Secundum quod genus uerbi accipiendum est quod ait apostolus: *Nemo dicit: Dominus Iesus, nisi in spiritu sancto*; cum secundum aliam uerbi notionem dicant hoc et illi de quibus ipse dominus ait: *Non omnis qui mihi dicit: Domine, domine, intrabit in regnum caelorum*. … **Verbum est** igitur quod nunc discernere et insinuare uolumus, **cum amore notitia**. Cum itaque se mens nouit et amat, iungitur ei amore uerbum eius. Et quoniam amat notitiam et nouit amorem, et uerbum in amore est et amor in uerbo et utrumque in amante atque dicente. 「それゆえ、知識はすべて言葉であるか、それとも愛された知識だけが言葉であるかと問うのは当然である。私たちは自分の憎むものを知っていて、そういういやなものは、意識の中に孕まれるとか生まれるとは言わないのである。私たちの心に何からの仕方と触れるものがみな孕まれるのではなく、私たちが今論じているように、通常言葉とは言われないが知られるものがあるからである。すなわち、叫んだりただ考えたりする場合、音節と共に時の感覚を占めるものが言葉と呼ばれるし、また記憶から引き出されて定義されるものは、たといいやなものであって

も知られたものとして精神に刻印された言葉と呼ばれる。さらにまた、精神によって孕まれたものが好ましいものであるとき、それを言葉と呼ぶのが私たちの慣わしである。「誰も聖霊においてでなければ、イエスは主であるとは言わない」(I コリ一・二・三) と使徒が語ったことは、この第三の意味での言葉である。他方、「主よ、主よ、とわたしに向かって言うすべての人が天国に入るのではない」(マタ七・二一) と主が言われたその人々は、他の意味での言葉でもってそう言ったのである。…それゆえ、私たちが今識別し提示しようとした言葉は「愛を伴う知識」(*cum amore notitia*) である。精神が自己を知り愛するとき、その言葉は愛によって自己に結ばれている。また、精神はその知識を愛し、愛を知るゆえに、言葉は愛の中に、愛は言葉の中にあり、そして両者は愛し語る精神の中にあるのである。『三位一体』泉治典訳、2004年、pp.272-273。

98) *Glossa interlin. in I Ad Corinth.*, I Cor., XII, 2 (ed., 1634, VI, 302Fd); Peter Lombard, *Commentary on the First Letter to the Corinthians (In epistolam primam ad Corinthios)*, 12; PL 191: 1650.

99) *Matth.*, VII, 21.

100) cf. *Henrici de Gandavo Quaestiones ordinariae (Summa)*, a.1, q.2 [ed. by Wilson, p.29, ll.16-21]; 加藤雅人訳「神の照明なしに人間は何かを知りうるか」(1) —ガンのヘンリクス『定期討論のスンマ』a.1, q.2—、『外国語学部紀要』第9号、関西大学外国語学部、2013年10月、p.147。

101) Augustinus, *De Trinitate*, XII, c.15, n.24 (CCSL): Vnde Plato ille philosophus nobilis persuadere conatus est uixisse hic animas hominum et antequam ista corpora gererent, et hinc esse quod ea quae discutuntur, reminiscuntur potius cognita quam cognoscuntur noua. Retulit enim puerum quemdam nescio quae de geometrica interrogatum sic respondisse tamquam esset illius peritissimus disciplinae. Gradatim quippe atque artificiose interrogatus uidebat quod uidendum erat dicebatque quod uiderat. Sed si recordatio haec esset rerum antea cognitarum, non utique omnes uel pene omnes cum illo modo interrogarentur hoc possent; non enim omnes in priore uita geometrae fuerunt cum tam rari sint in genere humano ut uix possit aliquis inueniri. Sed potius **credendum est mentis intellectualis ita conditam esse naturam ut rebus intellegibilibus naturali ordine disponente conditore subiuncta sic ista uideat in quadam luce sui generis incorporea quemadmodum oculus carnis uidet quae in hac corporea luce circumadiacent, cuius lucis capax eique congruens est creatus.** 「このようなわけで、あの高名な哲学者プラトンは、人間の魂は肉体を着る以前にこの世で生きていること、また私たちが学んだものは新たに知るよりもむしろ、既に知っているものの想起であることを、私たちに説得しようと努めたのである。彼は、ある少年が幾何学についての解けない問題を出されたとき、あたかもその学問に精通しているかのように答えたという話をしている。少年は順を追って巧みな仕方でも問われたので、見るべきものを見、その見たものを語ったのである。しかし、これが以前知られていたものの想起 (recordatio) であるとする、すべての人、あるいはほとんどすべての人はそのように質問されても、同じことはできないであろう。なぜなら、前世においてすべての人が幾何学者だったのではないし、人類の中で幾何学者はほとんど見つからないほど稀だからである。それゆえ、こう言うべきである。知性的精神の本性は創造者の計画により、本性の秩序において知性的な事物に結合されており、それらの真理を独特な (sui generis) 非物体的な光の中で見るように造られている。これはちょうど、肉眼が私たちに囲む事物をこの物体的な光の中で見るようにである。それらの事物はこの光をとらえ、この光に適合するように造られているのだ、と。『三位一体』泉治典訳、2004、p.353。下線部 *circumadiacent*, *congruens* は、ヘンリクスのテキストでは、*circumiacent*, *congruus* となっている。

102) cf. *Henrici de Gandavo Quaestiones ordinariae (Summa)*, a.1, q.2 [ed. by Wilson, p.30, ll.26-28]; 加藤雅人訳「神の照明なしに人間は何かを知りうるか」(1) —ガンのヘンリクス『定期討論のスンマ』a.1, q.2一、『外国語学部紀要』第9号、関西大学外国語学部、2013年10月、p.147。

103) Augustinus, *De Trinitate*, VIII, c.3 n.4 (CCSL): Quapropter nulla essent mutabilia bona nisi esset incommutabile bonum. Cum itaque audis bonum hoc et bonum illud quae possunt alias dici etiam non bona, si potueris sine illis quae participatione boni bona sunt perspicere ipsum bonum cuius participatione bona sunt (simul enim et ipsum intellegis, cum audis hoc aut illud bonum), si ergo potueris illis detractis per se ipsum perspicere bonum, perspexeris deum. Et si amore inhaeseris, continuo beatificaberis. Pudeat autem cum alia non amentur nisi quia bona sunt, eis inhaerendo non amare bonum ipsum unde bona sunt.

Illud etiam quod animus tantum quia est animus, etiam nondum eo modo bonus quo se conuertit ad incommutabile bonum, sed, ut dixi, tantum animus, cum ita nobis placet ut eum omni etiam luci corporeae cum bene intellegimus, praeferamus, non in se ipso nobis placet sed in illa arte qua factus est. Inde enim approbatur factus ubi uidetur fuisse faciendus. Haec est ueritas et simplex bonum; non enim est aliud aliquid quam ipsum bonum ac per hoc etiam *summum bonum*. Non enim minui uel augeri bonum potest nisi quod ex alio bono bonum est. 「それゆえ、不変の善が存在しないならば、変化する善いものも存在しないであろう。そこで、ときには善いとは言えないあれこれの善いものについて聞くとき、善の分有によって善いこれらのものなしに、これらのものがそれを分有することで善いというその善自体を君が見ることができるならば—君は個々の善いものについて聞くとき、同時に善自体を知解するから—、こうしてあれこれの善いものを傍らに置いて善それ自体を見ることができるのならば、君は神を見るであろう。そして愛によって神に固着するならば、君は直ちに至福の中に入るであろう。しかし、善いという理由でだけ愛されうる他の善いものに固着して、それらの根拠である善そのものを愛することがなかったならば、君は恥をこうむるのである。

魂もまた、不変の善へ向き変わりつつある間はまだ善いのではないが、そのときでも魂である限り魂である。先に言ったように、それが魂である限り、私たちはそれを正しく知解して、すべての物的な光にまさるものとするが、これは魂自身においてではなく、魂を造ったあの術知(ars)においてなのである。なぜなら、魂は、それが造られるべきであると見られた所においてこそ、造られたものとして承認されるからである。これが真理であり、純一な善である。これはその善そのものにほかならず、それゆえまた最高善である。というのも、他の善によって善いものは、善を増したり減らしたりするからである。』、『三位一体』泉治典訳、2004、p.237。

103) cf. *Henrici de Gandavo Quaestiones ordinariae (Summa)*, a.24, q.6.

104) cf. *Henrici de Gandavo Quaestiones ordinariae (Summa)*, a.1, q.2 [ed. by Wilson, p.54, l.489-p.56, l.525]; 加藤雅人訳「神の照明なしに人間は何かを知りうるか」(2) —ガンのヘンリクス『定期討論のスンマ』a.1, q.2一、『外国語学部紀要』第10号、関西大学外国語学部、2014年3月、pp.124-125。

105) cf. Augustinus, *Soliloquia*, I, c.1, n.3 (PL 32, p.869): Te invoco, Deus veritas, in quo et a quo et per quem vera sunt, quae vera sunt omnia. Deus sapientia, in quo et a quo et per quem sapiunt, quae sapiunt omnia. Deus vera et summa vita, in quo et a quo et per quem vivunt, quae vere summeque vivunt omnia. Deus beatitudo, in quo et a quo et per quem beata sunt, quae beata sunt omnia. Deus bonum et pulchrum, in quo et a quo et per quem bona et pulchra sunt, quae bona et pulchra sunt omnia. Deus intellegibilis lux, in quo et a quo et per quem intellegibiliter lucent, quae



intelligibiler lucent omnia. 「真理なる神よ、わたしはあなたを呼びまつる。すべての真なるものは、あなたのうちに、あなたによって、あなたを通して真なのである。知恵なる神よ、すべての知恵あるものは、あなたのうちに、あなたによって、あなたを通して知恵あるものとなる。真実にして至高の生命なる神よ、すべての真実にかつ至高に生きるものは、あなたのうちに、あなたによって、あなたを通して生きる。至福なる神よ、すべての至福なるものは、あなたのうちに、あなたによって、あなたを通して至福である。善にして美なる神よ、すべての善にして美なるものは、あなたにおいて、あなたによって、あなたを通して善にして美である。英知の光なる神よ、すべての英知的に輝くものは、あなたにおいて、あなたによって、あなたを通して英知的に輝く」。『ソリロキア』清水正照訳、1979、pp.331-332。

- 106) cf. *Henrici de Gandavo Quaestiones ordinariae (Summa)*, a.1, q.2 [ed. by Wilson, p.36, ll.159-37, l.165]; 加藤雅人訳「神の照明なしに人間は何かを知りうるか」(1) —ガンのヘンリクス『定期討論のスンマ』 a.1, q.2一、『外国語学部紀要』第9号、関西大学外国語学部、2013年10月、p.155。
- 107) cf. Avicenna, *Metaph.* IX, 7 (ed. S. Van Riet, pp.511, 84- 512, 3) .
- 108) cf. Augustinus, *Soliloquia*, I, c.1, n.3 (PL 32, p.869) . 注106と同じ。
- 109) cf. *Henrici de Gandavo Quaestiones ordinariae (Summa)*, a.1, q.2 [ed. by Wilson, p.30, ll.37-38]; 加藤雅人訳「神の照明なしに人間は何かを知りうるか」(1) —ガンのヘンリクス『定期討論のスンマ』 a.1, q.2一、『外国語学部紀要』第9号、関西大学外国語学部、2013年10月、p.149。
- 110) cf. *Henrici de Gandavo Quaestiones ordinariae (Summa)*, a.1, q.2 [ed. by Wilson, p.31, ll.41-43]; 加藤雅人訳「神の照明なしに人間は何かを知りうるか」(1) —ガンのヘンリクス『定期討論のスンマ』 a.1, q.2一、『外国語学部紀要』第9号、関西大学外国語学部、2013年10月、p.149。
- 111) cf. *Henrici de Gandavo Quaestiones ordinariae (Summa)*, a.5, q.3.